Gundam Build Divers
GBWC
GIMM & BALL'S World Challenge
ガンダムビルドダイバーズ
ジムとボールの世界に挑戦！

Episode 2

ジムとボールの戦いはまだまだ続く!!!!

ジムはついに新たな機体を完成させる

GUNDAM BUILD DIVERS
GIMM & BALL'S
WORLD CHALLENGE

Episode 2-A

悪い、お前と……じゃ、ゴキゲンなパーリィ、出来ねぇ……

we built this city ～街をつくる男～

一見、小惑星にも見えるその認定デブリ集積地は、コロニー内に建てられたフォースネストの建築廃材に限って投棄が許可された大気圏外特別区画――とかなんとか、そんなものをわざわざ設定するなんて、GBNのディメンション・デザイナーはユーモアに長けているのか、真面目過ぎるのか、それともよっぽど暇なのか。なんにせよ、いまのボールにとって、ポリポッドボールが身を隠せるほどの巨大な浮遊物があちらこちらに漂ってくれているのは、ありがたいことではあったが。

ポリポッドボールのベース機体であるボールは、本来、格闘機動戦兵器として設計されてはいない。さらにその大きさからプロペラント（推進剤）の積載量にも限りがあり、微小重力空間を舞台にしたスラスターを駆使してのマニューバ合戦においては、圧倒的に不利と言えた。

けれど、ポリポッドボールには脚がある。しかも、ワシャワシャと。

真空を切り裂きヤツが迫る、その気配を感じる。足もとの浮遊物を踏み台に反射的に位置を変えた。いま右八脚が蹴りつけたのはデブリだろうか、それとも先に撃破されたガンプラの残骸か。

「んなの、なんだっていい……」

ボールは闘魂を滲ませ呟いた。

「ぜってー勝ってやる、このバトル……勝って、あいつに、ぎゃふんと言わせてやる……ぎゃふんなんて……僕も言ったことないけどね！」

見回せば、あたりにジム・タービュレンスの姿はなく、いまボールはぼっち、手強い敵を相手に激バトルしていた。

時間を少し戻そう。

それは、GBNにログインする直前――

「ちょ、よく聞こえない！　まわりうるさくて……！」

ボールは、大勢の人でごった返すガンダムベースのロビーで、十年型落ちのモバイルギアフォンを必死に耳に押し当てていた。

「なんか今日ガンダムベースがさ！　かわいいゲームキャラがAR越しにゲットできるスポットに選ばれたらしくってさ！　いつものガンプラファンだけじゃなくてそっちのファンもいっぱい来てて！　もう通勤時間のオレンジ帯系シティライン状態……！」

ジムの声が、喧騒の隙間を縫って、モバイルギアフォンの向こうから途切れ途切れに聞こえて来る。

「悪い、お前と……じゃ、ゴキゲンなパーリィ、出来ねぇ……」

「……え？」

ジムからの通話はそこで切れた。

「どういうことだよ……!?　おい！」

突然の拒絶に気が動転した。頭から血の気が失せ、ぼーっと思考力が低下する。

「……あれか？　僕のモバイルギアフォンが十年型落ちだからか？　OSの更新の対象外になって、かわいいゲームキャラをAR越しにゲットするアプリがインストール出来ないからか！　そうなのか！」

もちろん、そうでないだろうことは、ボールにもわかっている。じゃあ、

「なんでだよ……んな、いきなり……！」

いったん引いた血が、カッと熱くたぎって胸のなかに戻ってきた。理不尽な裏切りに対する怒りとなってこみあげる。僕たちは、一緒にレジェンドガンプラを見つけ出し、力を合わせパンチライン的なバトルに打ち勝って、共にゴールデン・ポリキャップをこの手に掴もうと誓い合ったとか合わなかったとかしたはずの仲じゃなかったのかよ！

「ひょっとして！」

はっと脳裏に浮かんだ――あいつ、ゴキゲンなパーリィ、ひとりムフフとお楽しもうって算段なのか？　そうか……そうですか、そうなんですね！

だったら！

「んなの、ぜってぇさせてたまるかよ……残ってる6つのゴールデン・ポリキャップ、あいつより先回りして……僕がお先に根こそぎ、オールゲットだぜ！」

さらに時計を戻そう。

その青年は、ダイバー名を『シモダ』といった。自然に任せた髪、小顔のおかげで実際より背が高く見える身体に、すっきり清潔な工務店風の作業着を着込んで、今日もあちらこちらのフォースを回っている。

「最近ご使用のフォースネストに、ご不満な点や不具合はございませんか？」

そう、彼はこのGBNで、フォースネストの改築や改築を請け負うことによりフォースポイントを稼ぐ、特別なダイバーだった。

そんな彼がこれまでに得た報酬は、0ポイント。

「フォースメンバーが増えたのでガンプラの格納スペースを広くしたいのですね？　では、すぐにアナハイムの月面ファクトリー級出荷待ちハンガーをご用意しましょう、あれだけの規模なら何百、何千機でも……え？　増えたと言っても二桁もいっていないから、そこまで馬鹿でかいのは必要ない？　そうですか……。それと、メンバーがリフレッシュできる空間をご所望？　でしたら、東西の絶叫系アクティビティやアトラクションを一堂に集めて……あ、そんなにだだっ広いお庭はない……。　あと、皆さんのバトルのモチベーションをアゲたい？　なら、世界中の三つ星シェフが朝昼晩腕を振るうフードコートを――」

とにかく要望に対する提案が、全部盛りというか、大味すぎて、一度としてオーダーを受けたことがないのだ。

そしていまもまた、フォースメンバーがバトル後、ゆったりリラックスできるフォースネストに改装したいという要望に対し、健康温泉ランドに建て替えるというプランを提案し、速攻で拒否られ、失意の中、事務所の前まで帰ってきたところだった。

既に陽は暮れている。

ふと見れば、入口の脇に一人の女性が立っていた。腰までの黒髪、薄く開いた美しい目と長いまつげ、柄のない上品でシンプルなワンピース。

お客さんかもしれない。シモダは俯き丸くしていた背筋を伸ばすと笑顔を作った。

「フォースネストの改装ですか？　それとも改築？」

声を掛けながら、ドアのタッチセンサーに手を伸ばす。

「どっちでもないわ」

女性は一歩シモダに足を踏み出し言った。

「むかえに来たの、あなたを」

「え？」

開いたドアの前で、シモダは訝しげにその女性の顔を見つめた。商売柄、人の顔を憶えるのは得意な方だ。仕事上の知り合いはもちろん、お客さんでも一度会えば忘れない。

5秒見つめた、思い出せない、10秒、11、13、16――「あ！」と記憶に触れた。

「ローレッタ女史？」

機体紹介 1

ポリポッドボール

ボールに4基の脚部と2基のアームを取り付けた仕様。脚部はフレキシブルな構造であり、宇宙空間ではまるでタコのように扱うことも可能である。

CHARACTER キャラクター紹介

ジム〈ティム・バレット〉

パーリィとGBNでのバトルが大好きな本作の主人公。突如としてボールの前から姿を消した。破損したジム・タービュレンスをベースに、何やら新しい機体を製作中のようで……。

ボール〈アズマ・カール・トンプソン〉

本作のもうひとりの主人公で、ジムの相棒。愛機はこだわりのポリポッドボール。陸海空、どのようなフィールドにもボールで立ち向かおうとする精神は買いたいところ。

ヴィオラ

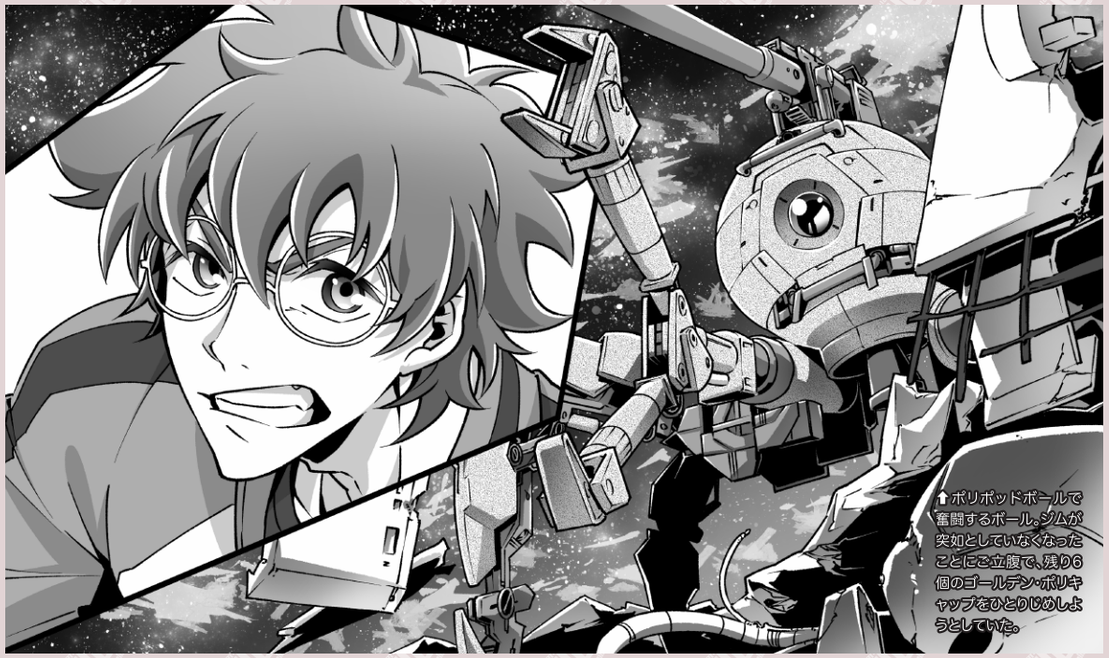
ジムのフィアンセ。ジムとの結婚に対しては不満はなさそうだが、ジムがガンプラにハマっていることにはあまり良い感想を抱いていない様子。単純にかわいい。

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode 2-A

皆さんのバトルのモチベーションをアゲたい？ なら、世界中の三ツ星シェフが朝昼晩腕を振るうフードコートを――

「ピンポーン」
事務所のドアは開いたまま。
「入らないの？」
口をあんぐり唖然と立ち尽くすシモダを、ローレッタが指で促した。
「ダイバーってアレですね、アバターまとってても、目線だけはリアルの面影が出るもんなんですね」
そう言いつつシモダは、応接のソファテーブルにコーヒーを二人ぶん置くと、ローレッタの向かいに座った。
「あなたも、ウチに来たばっかりの頃のあのキラキラした目、まだちゃーんと持ってる……とか言ってみたりして」
悪戯げに言いながら、ローレッタはコーヒーにミルクだけを注いだ。
シモダは表情を硬くした。
「よくわかりましたね、ここにいるって」
「前に見せてくれたことあったでしょ、あなたが仕事で失敗して落ち込んだ時、心を癒やすためにいつも作ってたガンプラ。すごく素敵だった。とってもアツい想いがこもってて、だからひょっとしたら、ガンプラで満ちてる世界に……GBNに……ひきこもってるんじゃないかって」
ひとくち口をつけたカップに、口紅がほのかに残る。
「……戻りません、会社には……」
シモダはぼそりと言った。
「直接の上司だったあなたならわかってるでしょう？　ボクにはセンスがないんです、才能が欠落しているんです。このGBNでも……。ひょっとしたら、こっちの世界でなら上手くやれるんじゃないか、なんて思ったりしましたが……結局リアル世界と同じでした……注文の電話は、一度だって鳴ったことがありません」
シモダはコーヒーカップを手にとった。
「きっと、ボクが作るガンプラだって……自分が一人勝手にカッコいいと勘違いして、思い上がってるだけなんです……」
見つめたコーヒーに、情けなさに歪んだ自分の顔が映っている。思わずスプーンでかき回して消す。
ローレッタは、そんなシモダを暫く見つめ――答える代わりに立ち上がった。
「シャワー借りるわよ」
「……え？」
「あと、ベッドも」


↑ポリポッドボールで奮闘するボール。ジムが突如としていなくなったことにご立腹で、残り6個のゴールデン・ポリキャップをひとりじめしようとしていた。

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode 2-A
ボクにはセンスがないんです、才能が欠落しているんです。このGBNでも……。

「は？　いや、あの、それは――」
「なに？　レディをソファで寝かせる気？」
「じゃなくて、泊まっていくつもりですか？」
「当然よ。ログアウトして目を離したら、その隙にシモダ、またどっか消えちゃうかも知れないじゃない……こっちね？」
ローレッタは、事務所の奥にめざとく居住スペースを見つけると、
「バスタオルお願い、清潔なやつ」
引き止めようとするシモダの声も聞かず、シャワールームを目指し、ずんずん歩み行ってしまった。
シモダはあとを追う代わりに、諦めの溜め息をひとつ大きく吐き出した。彼女が一度言い出したら引かないことを、シモダはよく知っていた。

＊

そんなことがあった夜でも、昼間の営業活動の疲労パラメータ値が溜まっているシモダは、横になったとたん深い眠りについた。寝心地の悪い事務所の応接のソファにもかかわらず――ローレッタが、夜通しなにやら家捜ししていることにも気づかずに。

＊

翌朝シモダは、けたたましく鳴り響く聞き慣れないベルの音で起こされた。それが目覚ましではなく電話の呼びだしであると気づくまでに、しばらく時間がかかった。
「……お客さんからの注文!?」
眠気が一気に醒めた。慌てて受話器をひったくる。
「お電話ありがとうございます！　フォースネスト改装のご用命でしょうか！　それとも改築!?」
電話の先から「え？」と、戸惑う声が返ってきた。
「あ、いや……フライヤーで見たガンプラバトルに、エントリーしようと思って連絡したんだけど」
「……はぁ？」
間違い電話かと肩を落としかけたシモダは、そう言えば――と、ローレッタの気配がどこにもないことに気がついた。

＊

「勝ち抜きガンプラバトルやりまーす！　優勝者には、リストの中からお好きな賞品をさし上げまーす！」
ローレッタは、シモダの事務所からほどほど離れた大通りでフライヤーを配っていた。ようやく彼女を見つけたシモダが、慌てて駆け寄って来る。
「なにやってんですローレッタ女史！」
「シモダのあのキラキラした目、また見たいなぁって思ってね」
「……え？」
戸惑うシモダにローレッタは、ふふんっと勝ち誇ったように夜通しで作ったフライヤーを掲げて見せた。そこには、シモダのガンプラとの勝ち抜きバトルの告知。そして優勝賞品として、彼女が家捜しして見つけ出したシモダの宝物（に違いないと彼女が勝手に思ったもの）たちが、リストアップされていた。
「もうGBNにはバトル開催申請出しちゃったから。対戦相手に宝物持ってかれたくなかったら、最後まで勝ち抜くしかないよね、シモダ！」
「えええええーっ！」

＊

「マジですかーっ！」
彼にヒキの才能があるのか、それとも導かれたのか。ボールは、やけくそに選び訪れたディメンションの街角で、ローレッタが配りまくったフライヤーを手に、歓喜した。
リストされているシモダの宝物の中に、ゴールデン・ポリキャップの名があるのを、彼は見逃さなかった。

Episode 2-B
No more lonely nights ～ひとりぼっちの夜はもう……！～

時計を再び巻き戻そう。
「なんだかそっち、超うるさくない？　聞こえる？」
壁一面に開いた窓外に青空とアッパーサイド・シティパークを一望する、高層アパートメント最上階のリビングで、ジムはボールに連絡を入れていた。GBNにログインするため、ガンダムベースに来ている頃だ。
「悪い、お前と約束してた時間、遅れるわ。このままじゃゴキゲンなパーリィ、出来ねぇと思ってさ」
ちょっとやりたいことがあって――そう告げようとした時、
「こっちの話がまだ終わってない！」
ジムの手から、ディーラーより今朝届いたばかりの最新モバイルギアフォ

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode 2-B
勝ち抜きガンプラバトルやりまーす！優勝者には、リストの中からお好きな商品をさし上げまーす！

Episode 2-B オレが二足のスニーカー履いてエンジョイかませるほど器用じゃないっての、お前、知ってるだろ?

ンが取り上げられた。
「ちょ、電話してる途中――」
「どういうつもりなの!? ひとことの相談もなしで大学の入学取り消すなんて!」
「だからんなの、なんで従兄弟のお前にいちいち相談しなきゃなんないんだよ」
「フィアンセでしょ!」
ヴィオラは、奪ったジムのモバイルギアフォンを、フリルのついたブラウスの胸の前で両手に隠すように抱いた。ぷんっと頬を膨らませる。
しかしそう言われても、物心つく頃から気づけば毎日のように遊んでいた父親の妹の娘を、ジムはどうしても婚約者として見ることができない。それどころかフィアンセなんかがいるおかげで、いままでの人生モテなかったのだ、そうに違いないと、逆恨みすらしている。
「だから言ってんじゃん――」
ジムは、モバイルギアフォンを取り上げられ手持ちぶさたになった手で、リビングテーブルのヴィオラお手製ミントクッキーをひとつ口に放り込むと、
「寄付って名前の金の力で卒業出来んの決まってんだぜ。んな親父の会社継ぐために単位集めするだけの四年間なんかより、サイコーのパーリィ、エンジョイする方がよっぽど人生経験アガると思わね?」
「だったら私もその、がんばるパーティーに誘いなさいよ」
「ガンプラパーリィだし、お前の趣味とはぜってー、合わねぇし」
「さっきの電話の女の子とは気が合うってわけ?」
ジムは「はぁ?」と、
「あれって男だし」
「うそ」
「ギアの履歴、名前見てみれば?」
ヴィオラは、自分がジムのモバイルギアフォンを奪い取った事を忘れていたらしく、一瞬ハッとなったが、
「覗き見の趣味なんてないもん」
ギアをテーブルに置くと、ぼすんとソファに座って、
「でも、そんなの、大学通いながらでもいいでしょ」
「オレが二足のスニーカー履いてエンジョイかませるほど器用じゃないっての、お前、知ってるだろ?」
ヴィオラの表情が「確かにそうかも」と納得しかけた。それでも不機嫌顔に変わりはない。確かジムの一つ年下だったか。普段は年相応だがふくれっ面になると随分と幼く見える。
ジムは、やれやれと頭を掻きながら、部屋の片隅に置いておいた、スーツケースほどの大きさの特注ガンプラ移動用コンテナへ歩み寄った。
「んじゃひとつ、頼みごとしていいか?」

＊

ジムがローレッタのお手製フライヤーを握りしめ、案内にあったシモダの事務所へとやってきた時には、既にガンプラバトルのエントリーを希望するダイバーが4人、列をつくっていた。引っ張り出した事務机を事務所の入口前に置き、ローレッタが受付嬢役をかってでている。そんな様子をシモダは事務所の中から、薄く開けた扉の隙間越しにに覗いていた。
「ご希望の賞品は?」
ローレッタの問いに、ダイバーたちがリストの中から順番に答える。「初期ロット1／144 RX-78ガンプラの箱（中身無し）」「キャップをちゃんと閉めなかったので、半分使ったところで固まってしまったパテ」「ガンダムEz8がビームサーベルで雪原の雪を溶かし風呂を湧かしている場面を再現しようとしたが、雪パウダーが足りなくなって、結局そのまま忘れ去られていた作りかけのジオラマ」「1／144 MSN-02ガンプラに同梱されていたディスプレイ用のア・バオア・クーっぽい台座（ジオング本体無し）」等々。
「もっといいのがあったと思うけど――」シモダの心の中に疑問が渦を巻くしがる? ま、だからこそ、こんなに少人数しか集まらなかったんだろうけど。というよりこのバトル、挑戦なんて受けなくてもいいのでは? 別にあげてしまっても困らないモノばかりだし――」
ふと、彼の目が、フライヤーに並んでいる宝物リストを見つめた。
「たったひとつ……アレを除いては」
列の最後尾に並んでいるボールも、先のダイバーたちの希望賞品を聞きつつ、心の中で呟いていた……ニヤリと、
「みんな、アレの価値知らないみたいだし……っていうか、どんな価値かと聞かれれば自分にもわかんないけど。とりあえず闇金型マフィアにGBNに閉じ込められた僕らをログアウトさせてはくれたけど……」
ふと、思った。

Episode 2-B ゴールデン・ポリキャップが立ち向かえと告げている、そんな気がするんです

「他にもなんか、力あるのかな」
どう思うジム? ――問おうとして、彼がいないことを思い出した。なにやら悔しさと寂しさが一緒になって、鼻の奥にこみあげた。
「なんだっていい……先まわりして全部独り占めすれば、きっとあいつにギャフンと言わせられる……」
しつこいようだがボール自身、生まれてこの方、ギャフンなんて言ったことなどなかったが。
ボールに順番が回ってきた。ダイバー名など必要事項をひと通り告げる。ローレッタは、それらをタブレットのエントリー受付ページに入力し終えると、ボールの顔を覗き込むように最後の質問をした。
「ご希望の賞品は?」
「もちろん君を! ……ってホントは言いたいんだけど、今日のところは、ゴールデン・ポリキャップで」
次の瞬間、事務所の中からシモダが飛びだした。ローレッタの隣で事務机に両手をつき、ボールに向かって身を乗り出す。
「アレがなんだか知ってるんですか!?」

バトルフィールドへと向かうチャーターシャトルのキャビンで、シモダはボールと、そしてローレッタに、ゴールデン・ポリキャップとの出会いを語った。ある日突然眩い光に包まれたこと。輝きの中で憶えのない声を聞いたこと――その声から「『ソレ』がきっと自分を導いてくれる」と告げられたこと。そして輝きが失せ、気づいた時には、自分の手にゴールデン・ポリキャップが握られていたこと。
「すっかり忘れていました、あの出来事を……けれど、ローレッタ女史が、しまってあったゴールデン・ポリキャップを見つけ出してくれて、ボールさんがそれを求めていま、ボクにバトルを挑んでくれようとしている」
シモダはボールとローレッタにまっすぐ視線を向けた。
「ボクは自分に自信がありません、仕事にも、ガンプラのセンスにも。このバトルも早々敗れてしまうかも知れない。けれど……それでもボクは、闘わなければならない気がします……ゴールデン・ポリキャップが立ち向かえと告げている、そんな気がするんです」
決意に拳を握りしめるシモダをローレッタは暖かく見つめ、そしてそんなローレッタを、ボールは最高のキメ視線で見つめた。
「ローレッタさんとおっしゃるのですね……とても素敵なお名前です」

⬆大学にいかず、GBNでのバトルに没頭するジムに対し、ほっとかれているヴィオラは怒り心頭。ジムのためならGBNへの進出も辞さない姿勢を見せた。

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode 2-B

僕はローレッタさんにダサいところを見られたくないんだぁぁぁぁ!!

バトルフィールドは、コロニー内に建てられたフォースネストの建築廃材に限り投棄が許可された、眼下に青く輝く地球を見下ろす大気圏外特別区画。その作業用モビルスーツ発着ドックから、最初の対戦者――ザク06Rと対峙すべく、シモダのガンプラがフィールドへと姿を現した。

圧倒するようなその偉容に、待機場所兼ギャラリースペースとなったチャーターシャトルのキャビンで、ボールは、ローレッタや出場順を待つ他のダイバーたちともに思わず息を飲んだ。

「ストライクフリーダム！」

――をベース機体とし、

「無重量域機動用スラスターを補強！」二番手出場ダイバーが叫び！

「大気圏内マニューバ対策も強化！」三番手出場ダイバーが圧倒され！

「重火砲！」四番手出場ダイバーがビビり！

「重装甲！」五番手出場ダイバーが感心し！

「キラキラ感！」ローレッタが頬を染めた！

まさに全部の乗せにした、てんこ盛り。

そのコクピットでシモダは、大きくひとつ深呼吸すると、静かに閉じていた眼を、気合でグッと見開いた。

「ストライクフリーダムガンダムMR-G！　このバトル……受けて立つ！」

＊

そして時計は、エピソードの冒頭へ戻る。

ストライクフリーダムガンダムMR-Gの力は圧倒的だった。先に対戦した四体のガンプラはまさに瞬殺の勢いで撃破され、いま、最後の挑戦者であるポリポッドボールが、バトルフィールドで必死に勝機を探っていた。

ポリポッドボールのベース機体であるボールは、本来、格闘機動戦兵器として設計されてはいない。更にその大きさからプロペラント（推進剤）の積載量にも限りがあり、微小重力空間を舞台にしたスラスターを駆使してのマニューバ合戦においては、圧倒的に不利と言えた。

けれど、ポリポッドボールには脚がある。しかも、わしゃわしゃと。

真空を切り裂きストフリMR-Gが迫る、その気配を感じる。足もとの浮遊物を踏み台に反射的に位置を変えた。いま右八脚が蹴りつけたのはデブリだろうか、それとも先に撃破されたガンプラの残骸か。

「んなの、なんだっていい……」

ボールは闘魂を滲ませ呟いた。

「ぜってー勝ってやる、このバトル……勝って、あいつに、ぎゃふんと言わせてやる……ぎゃふんなんて……僕も言ったことないけどね！」

しかし、ボールとストフリではスペックに差がありすぎる。

それを気力や根性で補うのはとうてい不可能だ。

逃げようとする先々に、凄まじい機動でストフリMR-Gが先回りする。

砲を放てばたやすくかわされ、攻撃を防ごうと建設廃材デブリを盾にすれば、ストフリMR-Gの火力はそれを木っ端微塵に粉砕する。

そして気づけば、あっという間もなく、絶体絶命。

一瞬シモダが申し訳なさそうにボールを見た――そんな気がした。

「ジムにぎゃふんと言わせるのなんてもう、どうでもいい……僕は、僕は……」

ボールは屈辱にグッと奥歯を食いしばった。

「僕はローレッタさんにダサいところを見られたくないんだぁぁぁぁ!!」

その時ボールは、遥か彼方に輝く何ものかを見つけた、シモダも気づいた、ローレッタも目を凝らした。

皆の視線の先、輝きは凄まじい速度で接近し、遂には見たことのないガンプラとなって、バトルフィールドに降臨した。

「誰にギャフンって言わせるだって？」

その声は、フォース専用の通信回線に乗って、ポリポッドボールのコクピットに飛びこんできた。

「ジム！」

Episode 2-C

Here I go again ～また、はじめるぜ～

そのガンプラは、追い詰められたポリポッドボールをからめ捕り身動きできなくさせている廃材デブリに向けて、ビールライフルを放った。大出力で気に薙ぎ払う、退路が開けた。

「80㎜ギャノンじゃ、速射しても逃げ道つくれなかったのに！」

九死に一生を得たボールは思わず声を洩らしつつ、急ぎシモダのストライクフリーダムMR-Gとの距離を確保すると、自分を背後に守るように割り入った目の前の勇姿に、息を飲んだ。

優性進化者たるジム・ドミナンスの正統なる凜々しさと、猛者のたてがみがごとき乱気流を思わせるジム・タービュランスの激しさとを兼ね備え、かつ、その双方を完膚なきまでに蹴散らしてしまうような、まったく新しい可能性を具現化した――

「ジム……そのガンプラ……？」

驚くボールに、コクピットのジムは、フフンと鼻を鳴らして、

「ガンダム・ストームブリンガー！」

対峙しているシモダのストフリMR-Gを睨みながら答えた。

「このあいだのヨシの、ゼータキュアノスとやったパーリィ――」前エピソード、蕎麦デリバリー『三木亭』の、レジェンドガンプラ・オーナーとのバトルの事だ。「あん時は結局ボール、お前がセリカちゃんを空にぶん投げてくれたおかげで、負けはしなかった、けど……心底ゴキゲンってわけでもなかった」

「勝てなかったから？」

「ああ……で、考えてみた。それってオレが弱かったからか？　んなワケねぇ、オレはいつでもサイコーだ。じゃ、ヨシが強かったから？　ひょっとしたらそれはあるかもしれない。けど、ホントのワケは別にある……」

「本当の理由？」ボールは思わず復誦した。

「ああ、オレが勝てなかったマジな理由、それは……ヨシのガンプラがガンダムだったのに、オレのガンプラがガンダムじゃなかったらだ！」

「シンプル！」

ボールは、稲妻に脊髄貫かれんばかりの衝撃に、ケツ弾かれたように叫んだ。まさにジムにふさわしい思考ロジック。

確かに、いま目の前にいるジムの新しいガンダムの勇ましさは、ヨシのゼータキュアノスに、そして、シモダのストフリMR-Gともがっぷり四つに組んで肩を並べる。

「ストームブリンガー……」

訪ねるようにボールは呟いた。

「知らねぇの？　『混沌の嵐の剣』ってミーニング」

「お前がよくそんな……教養溢れるネーミングを……」

「んなのオレが思いつくわけねぇし！　フィアンセのヴィオラに頼んで――」

言いかけて、ジムは慌ててゴニョゴニョ言葉を濁した。

「そうだったんだ……そんな凄いガンダムつくってまで……」

ふと、驚きに目を見開いていたボールの表情が、険しくなった。

「僕が狙ってたゴールデン・ポリキャップ横取りしようってんだね？」

機体紹介 2

ガンダムストームブリンガー

“俺のガンプラがガンダムじゃなかったから勝てなかった”――との答えにたどり着いたジムが、ジム・タービュレンスからさらに改良を施した機体。頭部はガンダムフェイスに換装されたほか、肩部、腰部、バックパックもすべて新規造形となり高機動仕様に。武装も2連ビームキャノン、ボックスタイプビームサーベルなど近～中距離戦闘に幅広く対応する。

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

Episode 2-C

ヨシのガンプラがガンダムだったのに、オレのガンプラがガンダムじゃなかったからだ!

Episode 2-C

ジムがせっせとストームブリンガー組み上げてる間に、僕は順調に恋の坂道、のぼりはじめてたってやつ？

こちらはこちらで残念な思考だ。

「はぁ？　なにそれ？」

「ゴールデン・ポリキャップ一人で総取りして、僕抜きでレッツ・パーリィしようって魂胆なんだろ！」

「わけわかんねぇんだけど？」

「わけわかんないのはこっちだよ！」

いいや、一番わけわからなく思っているのはシモダだ。いきなり目の前にジムのストームブリンガーが現れたかと思えば、自分そっちのけでガンプラバトルならぬ痴話バトルがはじまったのだから。

シモダはここまでで、ボール以外の挑戦相手を全機撃破していた。

まずは宇宙区間での戦闘に強みを誇る『ＭＧ ザクＯＧＲ』とのバトルに、ボリュームアップさせた無重量域機動用スラスター・バーニアをたくみに駆使し勝利した。

次いで、大気圏内環境での戦闘なら有利と、付近の廃棄コロニーにまでシモダを引き込んだ『ＭＧリゼル隊長機』に対しては、より剛性を強化した空力マニューバ対策が功を奏した。

続いて重武装に特化した『ＭＧ ＦＡＺＺ』を、更には重厚な装甲を誇る『ＭＧ ガンダムＮＴ－１（チョバムアーマー付き）』を、それぞれ他キットから流用し装着したパーツによる機能強化で。

そして、メッキ全開のキラキラ感を武器に押し出し立ち向かってきた『ＭＧ ガンダムベース限定トールギススペシャルコーティングバージョン』すらも、もともとセクシーなキットをよりいっそうプロポーションアップさせておいたストフリＭＲ－Ｇは、華麗にグラマラスに蹴散らした。

自らの戦果に、シモダは自身、驚いた。

しかし、シャトルのキャビンから見守っていたローレッタは、驚きはしなかった。

彼の全部盛りのセンスは、けっして欠点ではない――個性だ。持てる力のすべてをもって仕事にぶつかろうとしている姿勢の現れだ。そしてその熱量は、彼のガンプラからも滲み溢れている。

勝ち負けは重要じゃない。けれど、シモダならきっと、やり遂げられる。

そんなローレッタの気持ちをボールは、そしてジムも……当然、知る由などなかった。

「これ以上、邪魔させない……！」

ボールは、ガンダム・ストームブリンガーの猛々しさに呑み込まれまいと、必死に声を絞り出した。

「これ以上、ローレッタに格好悪いトコ見せらんないし！」

「ローレッタ……って、だれ!?」

ジムは意表をつかれたように驚き訪ねた。

「ひょっとして、イケてる女子か？」

ふと形勢が逆転する音がした。一転ボールは、「まぁね」と勝ち誇ったように、

「ジムがせっせとストームブリンガー組み上げてる間に、僕は順調に恋の坂道、のぼりはじめてたってやつ？」

ローレッタはゾゾゾッと虫酸が走るのを感じた。二人のフォース回線通話はシャトルには聞こえていないにもかかわらず。

「ボールの方こそ、オレをハブって、ひとりでいい子ちゃんとラブラブエンジョイライフ楽しもうって段取りだったのかよ！」

ストームブリンガーが、ボールの胸ぐらに掴みかからんばかりの勢いで、ポリポッドボールにダッシュした。

「だから一人で楽しもうとしてたのはそっちだろ！」

はじき飛ばされまいとポリポッドボールは、イ・ロ・ハ・ニの全四脚でデブリを踏みつけ踏ん張った。

二人がぶつかろうとした――その時、ストームブリンガーの目前に、シモダのストフリＭＲ－Ｇが割り入った。「！」っと慌てストームブリンガーがフル・バーニアで急制動をかける。

シモダのことをすっかり忘れていたボールもハッとなった。

「んだよ、お前は！」

ジムは行き場を失った勢いをぶつけた。

「君の方こそなんなんだ！」

既に四機のガンプラに勝利しているシモダは、物怖じしていない。

「いま、ボクは彼と、ゴールデン・ポリキャップを懸けたバトルをしてるんだ！　これはローレッタ女史がくれた大切なチャンス――」

「こっちだって、その女子めぐってこいつと大事な話してんだよ、邪魔すんなよな！」

噛みつくジムに、シモダは退かない。

「君の方こそ邪魔するな！」

ボールも賛同した、

「そうだよ邪魔するなよ！　……シモダ！」

ジムの方に。

「……へ？」シモダと共に、ローレッタも素っ頓狂な声を洩らした。

「僕だって」ボールはシモダに言った。「ローレッタがくれた大切なチャンス、ジムになんかぜってー横取りされたくないんだ！」

「あげてないあげてない、チャンスなんてあげてない、何のチャンスかもわかんない」

ローレッタは訴えるもボールには届かない、回線なしでは。

ジムは、シモダのストフリＭＲ－Ｇをギッと見据えた。

「オレは売られたケンカは釣り銭突っ返してでも買わねぇと済まねぇタチなんだ！　どけよ！」

ビームライフルを向けた、トリガーを引く。

一瞬早くストフリＭＲ－Ｇが頭上方向に素早く距離を取った。ストームブリンガーのライフルビームの軌跡が追いかける、しかし、ストフリＭＲ－Ｇのマニューバが勝った、当たらない。

「早ぇ！」ジムが舌を打つ。

対し、シモダもライフルで反撃しようとした――ところに、ポリポッドボールが、全脚の先端マニピュレータで足場としていたデブリを掴むと、

「ジムは僕が潰すんだってば！」

ストフリＭＲ－Ｇに向かって投げつけ牽制した。反射的にシモダは、砲口をストームブリンガーから投げつけられたデブリに向け変えた。

その隙を逃さず、今度は、ストームブリンガーがライフルを放った。ストフリＭＲ－Ｇのスラスターが咆哮をあげる、間一髪かわした。

ここに急遽、シモダ対ジム＆ボール、二対一のガンプラバトルが幕を開けた。

「ボクの本来の対戦相手はあくまでもポリポッドボールだ……まずは、あのガンダムを排除して、舞台を元に戻す！」

シモダは一刻も早くストームブリンガーを排除しようと考えた。スーパードラグーンのマルチロックオンを対象に集中させ、フルバーストで放って一気にカタをつけるか？　しかし、コーディネーターというスペシャルなダイバー設定がない自分にでも、使いこなせるだろうか？　いいや――

「駄目でもともと！」

次の瞬間、ストフリＭＲ－Ｇが青く眩い翼を広げ、それが八本の竜の吐くエネルギーの槍となってジムのストームブリンガーに襲いかかった。

そのすべてを、ストームブリンガーはかわしきった。

機体紹介 3

ガンダムストライクフリーダムMR－G

レジェンド・ガンプラのひとり、シモダが製作した超ダイナミックなガンプラ。高機動ユニット兼武装プラットフォームである「スーパードラグーン機動兵装ウイング」の装備による優れた運動能力は、VSガンダムストームブリンガー&ポリポッドボール戦でもいかんなく発揮された。超大型ビームライフルによる火力も抜群。ストライカージンクスの肩装甲を利用するなど、各所に工夫も施された1機。

Episode 2-C

あんなもん食らったらひとたまりもねぇ！あのストフリ半端ねぇな！

Episode 2-C

よしっ！ これでゴールデン・ポリキャップ2つ目！ なんの役に立つのかは、ちょー謎だけど！

シモダが自ら指摘した通り、彼が使いこなせなかったのか、それとも彼ストームブリンガーの機動力が、それを成したのか。いずれにしろ、

「あんなもん食らったらひとたまりもねぇ！　あのストフリ半端ねぇな！」

ジムはシモダのストフリMR-Gの力に圧倒され、

「彼のあのガンプラ……ただ者じゃない！」

シモダはジムのストームブリンガーのスペックに舌を巻き、そしてボールは、

「んだよ……なに二人で仲良しエンジョイ・バトルしてんだよ！」

ポリポッドボールが、無我夢中で180㎜キャノンを放つ。

ひょっとするとシモダは、無意識にポリポッドボールの事を見くびっていたのかもしれない。その油断を突き、キャノンの砲弾が、ストフリMR-Gにディテールアップパーツとして装着されていた、ストライカージンクスの肩装甲に着弾した。

Eカーボン製設定であるジンクス装甲の性能値なら本来、キャノン程度の被弾になどビクともしないはずだった。ところが、

「装甲が破断した!?」

ボールはハッとした、エアガンプラの経験をたどり、理由を探す――

ひょっとすると、

「ジム！　やつのストフリ、ガンプラの表面処理が甘いのかも知れない！」

「マジ!?」

シモダ本人も、装甲の破断に驚いた。

「忙しかった仕事の合間を見つけてはせわしなく作ってたから、整面が乱れたままだったのか!?」

よく見れば、装甲パーツ上に、ゲート処理の際えぐってしまった傷が、いくつか残ったままになっている。

「このままじゃ、機体スペックは想定値から大きく減退する！」

シモダは自問した。このままバトルを続けても、何も見つけられないまま、敗北してしまうだけかも知れない……棄権するか……？

「……いいや、それでも！」

シモダは、ストームブリンガーとポリポッドボールをグッと睨みなおした。

「傷を突かれる前に勝負をつける！」

勝負に出た、スラスターを全開にして最大加速で突進する。迎え撃つジムとボールは、ビームライフルとキャノン砲の飽和攻撃を浴びせた。傷面に被弾したストライクフリーダムMR-Gの追加装甲キットが一枚、また一枚と断裂し脱落していく。全部盛りの機体が重量バランスを大きく崩した、マニューバ性能を一気に失う。

勝負はついた。

＊

敗退したダイバー達は既に退散し、シモダの事務所には、シモダとローレッタとボール、加えてジムが戻っていた。

「え？　いいの？　賞品のゴールデン・ポリキャップ貰っても？　二対一でバトっちゃったのに」

ボールはそう言いつつも、遠慮なしに両手を差しだした。

シモダは苦笑しつつ、賞品であるゴールデン・ポリキャップを渡して、

「たとえボールさんが一人だったとしても……ガンプラの表面処理の甘さを見つけられた時点で、ボクの敗北は決まったようなものでしたから」

「よしっ！　これでゴールデン・ポリキャップ2つ目！　なんの役に立つのかは、ちょー謎だけど！」

とりあえずガッツポーズのボールの隣で、

「じゃ、特別賞と言うことで」ジムが悪びれることもなく言う。「ローレッタちゃんはオレが」

ローレッタは冷ややかな視線を向けた。

「あたしは賞品違うし」

「ローレッタ女史」

シモダはローレッタの前に歩み立った。

↑高機動がウリのストームブリンガー、ストフリMR-Gによる激突。装甲表面処理の加工技術の差がバトルの勝敗を分けたが、その能力においてはほぼ互角であったと言えるだろう。

Episode 2-C

「ブイカーズ」――いい名前だと思わね？ ゴキゲンなパーリィエンジョイするのに……二人で

「ボク、何かを見つけられたんでしょうか？」

「あたしにはわからない。でも、あなたは逃げなかった」

シモダはハッとなった。そうだ、自分は勝てなかった……でも、逃げなかった。

「ボク、大好きです」

「え？」

驚いたように頬を染めたローレッタを、シモダはまっすぐに見つめて、

「あ……ああ、そっちね？」

彼女は、別の意味で赤面しつつ、

「……いつでも戻っていらっしゃい」

シモダは嬉しそうにうなずくと、こんどはボールとジムの方を向いた。

「お恥ずかしい話、GBNにログインして以来、ガンプラつながりで出来たお知り合いは、お二人が初めてなんです。もしよかったら見て貰いたいものがあるんですが、事務所裏の倉庫に――」

言いつつ向かい歩み出そうとしたシモダは、ふと、二人を振り返った。

「お二人って本当に息ピッタリのフォースですね」

突然の言葉に、ボールとジムは目をぱちくりさせた。

「フォース名を教えてもらってもいいですか？」

シモダは聞いた。

「え？　えっと……」

戸惑うボールの隣で、ジムはニヤリと、

「ブイカーズ」

人差し指と中指でビクトリーマークを作った。

「『勝利のカード』？」

ローレッタが問う。

「考えててくれんだ？」

ボールも驚きジムに問うた。

「いい名前だと思わね？　ゴキゲンなパーリィエンジョイするのに……二人で」

微笑むジムに、

「それもフィアンセ？」

「オレに決まってんじゃん」

「ふぅん……ま、悪くないんじゃない？」

ボールは白い歯を見せた。

Episode 2-D

Girls Just want to have fun.
～女の子は楽しみたいの！～

ジムとボール、そしてローレッタは、シモダに連れられて事務所裏の倉庫へやって来た。

シモダは三人を中に招き入れると明かりをつけた。簡素で小ぶりな体育館ほどの広さの、天井の高い造りの中に、フォースネスト改装改築用の建材や家具や調度品などが所狭しと積み置かれている。

「僕らに見せたいものってなにかな？」

ボールは、皆を先へと案内し進むシモダの背中を見ながら、隣を歩くローレッタに聞いた。彼女も首をかしげる。

「つーか」ジムは前を歩くシモダに、「ゴールデン・ポリキャップの持ち主ってことは、あんたもレジェンドガンプラのビルダーってことだよな？」

そう問おうとして――ふと、言葉を飲み込み、足を止めた。

ボールとローレッタも唖然と立ち止まる。

奥の巨大ラックに、それは鎮座し置かれていた。フォースネスト関連の品々とは明らかに異質なマテリアル。

三人は、圧倒されながら見上げた。

「これって……ガンプラのウエポンじゃね!?」

洩らすように聞いたジムに、シモダは、

「まだ造りかけですが」

まんざらでもないふうに答えた。

ボールは、記憶の中を探った。

「僕のエアトリセツの中に、こんな武器ない……ひょっとしてオリジナル？」

「はい、多目的統合コンセプトウェポンモジュラー『ＧＨＬ-ＴＢＡ』です」

未完成ながらも、既に頼もしさが溢れ見える勇猛なそのフォルムに、ジムとボールは息を飲んだ。

「なんかすげぇ！」

「ＧＨＬ……って何の略？」

「『ガンアタック・ハイパーベロシティ・リンクアップ』です！」

「……って、どんな意味？」

ジムの問いに、シモダは答えた。

「わかりません！　雰囲気で名付けました！」

「ええぇーっ！」

「じゃ、ＴＢＡも適当？」

ローレッタが聞いた。

「そっちは、To Be Announced です」

「『後日発表』……？」

「本当はあとでちゃんとした名称をつけようと思っていまして、その意思の欠片くらいは、と……」

シモダが告げた、その時だった。

突如急接近してきた激しいスラスタープラストが、強烈な嵐のように倉庫に叩きつけ建物全体を揺さぶりはじめた。

『楽しそうなガンプラバトル・コンテスト、開催されてるってお聞きしてお邪魔したのに……野暮用のせいで間に合わなかったみたいだわ』

耳に心地よい上品でキュートな女の子の声。拡声スピーカから発せられているらしい、頭上から聞こえてくる。

驚き見上げた皆の視線の先で、いきなり天井が巨大な手によってバリバリと引き剥がされた、鋭く輝くガンプラの眼が倉庫内をのぞきこむ。

「あのガンプラ……キュベレイ！？」

キュベレイは、その手を倉庫の中に強引にねじ込んで、

『あーあ、いっつもそう。まったくもって気に入らないので、自主的に参加賞を頂戴していきますね』

「なんかやばい！」

ボールは反射的に駈けだした、ジムも続く。

「んだよあいつ！」

外に出た。ＭＧキュベレイをベースにした見事な造形のカスタムガンプラ、その巨体が覆い被さるようにして倉庫の中に手を突っこんでいる。

二人は慌てて駐機させておいたポリポッドボールとストームブリンガーを起動させた。

倉庫の中では恐怖するローレッタをシモダが抱き守っている。その目前でキュベレイの手がＧＨＬ-ＴＢＡを鷲掴んだ。奪い飛び去ろうとする。

「ちょ、待てよ！」

起動完了したポリポッドボールが、それを制止した。

『あぁ？』

キュベレイがポリポッドボールの方を向く。

『なに、この……虫』

キュートだった口調が、本性を剥き出した。

『キモぃ……来んな、寄んな、触んないでくれる……この反吐ムシ！』

引き止めようとしたポリポッドボールを、キュベレイが力の限り払いのける。

咄嗟にかわすも１８０㎜キャノンが吹き飛んだ。

「なにすんだ！」

遅れ起動完了したジムのストームブリンガーが詰め寄ろうとする。しかし一瞬早くキュベレイがスラスターを全開に吹かして飛翔、飛び去った。ストームブリンガーも追おうとしたが、

「構いません！」

シモダが、ローレッタと一緒に倉庫の中から出てきた。

ジムとボールは、それぞれのコクピットから「え？」と戸惑いながらシモダを見下ろした。

「でも――！」

「大丈夫です、ＧＨＬ-ＴＢＡの予備パーツならまだあるから、それに……」

シモダは、飛び去ったキュベレイを見送りながら、

「さっきのガンプラのダイバーが誰かはわかりませんが、誰であろうと……もしボクが作ったものが役に立つというなら、それは嬉しいことです」

ローレッタに、自信を得た表情を向け、

「そうだね、リアルで射出成形出来るように、ＧＢＮに譲渡申請しとかないと」

ローレッタもびっくり顔でシモダを見た。

「もしよかったら――」

シモダは、ストームブリンガーとポリポッドボールを見上げた。

「君たちにも貰って欲しい」

ジムとボールは、驚きを重ねた。

「君たちの手で、君たちのＧＨＬを完成させてくれないか」

「もしかして……」ボールは気づいた。

「そのために、僕たちを倉庫へ？」

シモダは答える代わりに、壊れた倉庫を見上げた。

「ボクは、倉庫の屋根を直すところから始めます。人のフォースネストばか

⬇突如とした現れた謎のモビルスーツ。その姿は明らかに、あの美麗なフォルムで数々のモデラーを虜にしてきたキュベレイであった。突如として現れたキュベレイの意図とは……？

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

キモぃ……来んな、寄んな、
触んないでくれる……
この反吐ムシ！

Episode 2-D

り気にしてて、雨漏りもそのままだったし、ちょうどよかった」
シモダの視線は。壊れた屋根の、その先の空を見ている。
ローレッタは微笑みを向けた。
ジムとボールも思わず笑った。そして――
「……あのキュベレイ……なんだったんだ？」

＊

ボールが念願だったアイドルバンドグループ『プチ・ルー』のライヴを訪れたのは、その翌日だった。推しは長女ギター（リードギター）の『のぞみん』。ねっとりと汗ばんだ熱気で満ちるステージを、ボールは存分に堪能した。
彼女たちの楽屋に、GBNで遭遇したMGキュベレイと、大量のガンプラが飾られていることを、この時の彼はまだ知らなかった。